ほ　翻訳上手になる

今はあまりそういうことは少なくなったが、行政の担当者が住民にまちづくり計画の内容を説明する際に専門用語や時には業界用語を使ってしまうことがある。業界用語というのは曲者で、まちづくりプランナーも業界に入りたての頃は、トケツとかセイカイホなどの言葉を打ち合わせなどで使えるようになると一人前になったような錯覚に陥る。まあ、仲間内だと可愛いものだが、それを間違っても外で使ってはいけない。

あまりに度がすぎる時には、専門用語の鎧を着て自分の立場を守っているのかと意地悪く思ってしまうこともある。まあ、そこまで悪意がないにしても、聞いている住民の側からするとわざと素人にわからない専門用語を使って煙にまこうとしていると思ってしまっても不思議ではない。そんな時にまちづくりプランナーとしては、内容をわかりやすく説明し直して話し合いを円滑に進めるようにしなければならない。人はわからない事を言われると反発したり反対の姿勢になりがちだ。ストレスなく理解できれば余裕を持って考えることができる。

このことは、行政と住民の関係だけでなく、住民同士の話し合いの場面でも当てはまる。専門用語を使うということはないが、自分の考えを人前でわかりやすく手短に話せる人はそういない。ひとつの発言に論点が複数含まれ、それが交互に入り混じって話される場合もある。そうなると聞く方も「この人は何を言いたいんだろう」となってしまう。人は自分の言っていることがなかなか理解してもらえないと何度もくりかえしてその事を話してしまう。そうなると「話が長くわからないことを言い続ける人」とレッテルを貼られてしまう。そんな時にもまちづくりプランナーは話の要点を手短に他の方に説明し直してあげることが大切になる。

それが「翻訳上手になる」ということだ。わかりやすく説明し直す事によって、発言の真意が参加者に共有され、話し合いにもより弾みがつく。そればかりではなく、発言した当人も自分が言いたかったことを的確に伝えてくれたことでまちづくりプランナーへ信頼を寄せることになる。そして他の参加者もまちづくりプランナーが関わってくれることで安心して話せるように感じるのだ。